

作戦はなお辛い、反転行軍にも命をかけていました。落ちる兵隊もいる。「殺してくれ」「置いていってくれ」という兵隊を何とか連れていくのに苦勞します。特に、軍医や衛生兵は、兵器も持たず、弱兵と単独行動は困難なのです。

結論は、戦争は補給なのです。戦闘は行軍でありま

若い志願兵の

湘桂撤退作戦まで

石川県 三宅 良

私の実家は石川県松任市菅波町、武田姓であり、男三人、女二人、五人家族の農家であったが、兄は軍隊に行き、台湾勤務でした。留守は姉・妹・弟で、私は高等小学校を卒業し、名古屋の国鉄養成所で勉強をしておりました。しかし、養成所は三年制のため幹部候補生にはなれないということでした。

その頃、役場の兵事係から、「君は二男だから志願したら」と言われました。その頃は、男はどうせ軍隊へ行くのだからという状況でした。配属将校も「軍隊へ行け、早い所行って、お前達は死んでしまえ」と、今思えばずいぶん乱暴な話ですが、国鉄養成所でも機関関係をやっていたためか、軍隊訓練を重点にしていたのです。特に、配属将校の権限は強かったのです。いくら、鉄道省関係の養成所といっても、軍隊の命令の方が優先してました。

当時、徴兵検査は、大正十三・十四年生まれが同じ年の昭和十九（一九四四）年に実施される程、兵員を必要としていたのでしょう。私は大正十五（一九二六）年生まれでしたが、志願をしました。昭和十九年七月、石川郡と松任町の者が一緒に、松任で検査を行われました。

私の体重は五〇キロを切っていたのですが、身長は一六二センチ、胸囲は狭いと言われたのですが、「第一乙種合格」となりました。しかし、入隊は遅いだろうと思っていたのですが、九月八日に現役徴集の知ら

せがきました。母は、大正十三年、十四年生まれの人
がまだ来ないのに、何で十五年生まれの私が入営する
のかと、心を痛めておりました。

入隊は、「十月二日、十時、松任駅発の臨時列車に
乗れ」との命令でした。同年兵は、長野県一〇〇人、
富山県一〇〇人、石川県一〇〇人の編成でした。服装
は、国民服に戦闘帽、奉公袋には千人針など二、三を
入れ、他の私物は、風呂敷に包んで行きました。その
中には油紙を持って行けというのが注意書きのような
ものに書いてあったと記憶しています。

当時、父は死亡していました（昔は海軍の主計だっ
たが、脳梗塞で六十三歳で死没）。そのため、二日の
五時に起床し、母と姉と一緒に神社へ行き祈願をし、
見送りの人々と、酒を飲み交わしました。出征祈願を
してくれた人々は、村中全員という程で、出陣式は二
キロ先の小学校で行われ、村長の挨拶を受けました。
その挨拶では「国の礎になれ、銃後はしっかり守る」
と言われましたが、当時我々は生きて帰ると思つて

はいない、死ぬと思つていました。

当時の戦況は厳しく、内地に残っている者は、我々
や適齢期の男のみで、小学校には小学生はたくさんい
たが、青年はいなくなつてしまいました。従つて見送
りはほとんどが女で、男は年寄りだけでした。見送り
の人々は松任駅まで送ってくれました。軍歌を歌い、
楽隊も軍歌の演奏でしたので、私も、何か浮き浮きし
た気持ちで「やるぞ、行くぞ」という気持ちになりま
した。

臨時列車の機関車は、C58式の臨時列車でした。既
に、長野・富山が各一〇〇人乗っていたと言われてま
したが、軍人はおらず、県の世話係の人が諸事世話を
してくれました。その時は、その列車に一般の人が乗
るのも認めてくれましたので、私の親しい人三人も敦
賀駅まで乗ってくれました。ほとんどが、志願兵で
あったから、そういう処置を採ってくれたのだろうと
思います。我々を世話する人は、腕に「石川県」の腕
章をつけていたので心強く感じました。後日、多くの
人に聞きますと、現役や召集された人々の輸送とは異

り、「我々若い志願兵に心使ってくれたのか!」と思
いました。

二日の晩は、列車の中に泊まり、三日昼頃門司に着
き、集合所は、門司高等女学校であるが、その日は、
各民家で三―五人程に、分散して宿泊しました。翌四
日に身体検査がありました。肺などが悪く、三―四
人が即日帰郷となり、家へ帰されました。彼らの心境
は随分複雑であつたと思います。

検査を終わった我々約三〇〇人は、五日に、五人に
一挺の九九式歩兵銃が支給されました。他の者は帯剣
のみ支給でした。飯盒は無し、竹筒の太いのは飯用、
細い竹筒は汁用とが組んでありました。係の話では、
現地で飯盒が貰えるというのでした。服は軍服が支
給されました。昼には、たすきをかけた婦人会の人
が、おにぎり、漬物を出してくれました。

門司から下関へ軍用船に、各兵科の軍隊や満蒙開拓
団の花嫁もたくさん乗っていましたが、満州へ行くの
だと言っていました。その花嫁たちから戦後、ソ連軍
が侵入し、随分苦勞したと聞きましたが、あの人達の

うち何人が、内地に帰ることができたかなあと時々思
うのです。

十七時頃、釜山に着いて、各兵科の人々と別れまし
た。我々は、有蓋車にアンペラを敷いて、一班約四十
人が一車両に、譲り合つて乗ることになりました。朝
鮮に一日後、北上して鮮満国境、更に山海関に到着し
たのは二、三日後でしたが、その間、八路军から手榴
弾を投げつけられ二人が戦死しました。我々の目的地
は柳河という所でした。そこには、騎兵第四旅団が駐
屯しておりました。

我々の本隊は、湘桂作戦に出動しているので、私ら
志願兵は教育できないというので、騎兵第四旅団で教
育を受けるということでした。そのため、その間はほ
とんどが乗馬教育、駄載等の教育、対戦車の破甲爆雷
攻撃でした。対戦車攻撃というのは、峭壺の中に身を
隠して、戦車が来たら爆雷を戦車につけ(磁石式
になってゐる亀の子型の爆雷)戦車を破壊するので
す。

その教育期間は十月十日から十二月二十日迄でした。二カ月間の教育が終わった我々は、本隊追及のため柳河を出発、津浦線で浦口へ、揚子江を渡って南京は正月に、中山間の所の兵站におりました。

その間に、第一次の南京空襲を受けたのです。日本租界の側に綿花などの倉庫がありました。部隊では空襲による焼夷弾が頭に直撃し戦死した者がいました。我々は、軍の酒を造っている工場で寝泊まりしていました。その間、酒造りの手伝いなども三月まで、三百人の兵隊が全員、工場の中にアンペラを敷いて泊まっていたのです。訓練より酒造りが主な仕事となっていました。まいました。

三月十日、南京から揚子江を遡って、武昌へ渡り、武漢大学の兵站へ行きました。そこで弾薬一二〇発、他に軍足、防毒面、手榴弾二発が支給され、完全軍装をすることが出来ました。小銃は三八式騎兵銃、三百人全員で追及の中隊が編成され、中隊長は曹長、入院下番（病院から退院した者）の下士官が指揮官（小隊長等）、他に入院下番の古兵が編入されました。

ここに、独立輜重兵第四連隊しちゆうじゆうの中の一個中隊が編成されたのです。輜重隊は、徒歩小隊である尖兵の後を行くのですが、車も馬もない我々は歩兵の装備をし、ての行軍でした。

武昌を出発し、四〇分歩き、十五分小休止、十二時には大休止で追及でした。武昌、岳州、長沙（二日休止）、衡陽、全県、桂林を迂回し、柳州に入る。一つの山の中で、ようやく本隊に追及することができました。ここで独立輜重兵第四連隊の編成の中に入ることとなったのでした。

独立輜重第四連隊の第一・二中隊は第二師団（仙台）、第三・四中隊は第九師団（金沢）、第五・六中隊は第六師団（熊本）で編成されたのです。私は、東北・新潟出身者が多い中隊に配属されました。東北の方は性格は良いのだが、言葉が分からないので困った時もありました。古い兵隊は、昔の輜重輪卒の人も何人かいたようでした。

我々の輜重部隊は馬が主力ですが、各自一頭のラバ

(雌馬と雄ロバの間に生まれた雑種で馬より小形だが、体質が強く耐久力がある)を担当させられました。主な輸送は、野戦重砲の弾薬運搬ですから、野砲より重い弾薬の運搬をしたのです。しかし、我々の敵は、在支米空軍のカーチスホークP51の戦闘機や、ロッキードP38という、双胴の戦闘機の重爆撃とその空襲でした。

柳州・桂林という所は、岩山がタケノコのようにある。南面にあるような景色の所で、その岩山の陰から急に出て来て、輜重隊の馬の列を銃撃するのですから油断はできません、遮蔽することも退避することもできないのですが、損害は割合少なかったようです。我々の第十一軍は貴州省の独山まで進攻するのだと聞かされていたのですが、軍は急に反転して、ソ満国境の警備に行くのだと聞かされました。

我々の仲間は一個中隊に四十人位配属されていたのですから八個中隊約三百人おりました。その中に各教育班には朝鮮出身の志願兵が二人位おりましたが、その人達はいつの間にかいなくなっていました。

撤退作戦中の行軍は、進攻作戦の時よりひどいものでした。我々は負けているのではない、命令によって撤退するのですが、やはり精神的にも、肉体的にも撤退は疲れるものでした。

終戦は、武漢地区の威寧へ下った時知らされました。戦闘は酷なのですが、我々は負けていないのになぜか、という気持ちがあり納得できませんでした。

しかし各中隊長が正式の軍装して来ました。連隊副官が終戦の詔書を持って来ました。その時、初めて終戦を正式に知ったのでした。その間、中国人街に「蔣委員長万歳」などが、白壁に書かれていました。

先程も申しましたとおり、行軍は苦勞でした。召集された我々の年少者にとっては親や叔父のような年齢の年配の軍医が、馬の尾につかまって、やっと歩いて見たのを見た時は、気の毒を通り越してかわいそうでした。

これらを見ながらの行軍でしたが、我々も落伍をすれば、やがては死であるのだから、何としても隊に付

いて行かねばならないと思いました。

我々は、終戦ということになったので、兵器を中国軍に渡さなければならぬ。その前に、騎兵銃にある菊の紋章を鏤で削り落としておきました。その後、中国軍の憲兵らが検査にきましたが、中国兵は時計・万年筆を欲しがりました。止まった時計の螺子（龍頭）を巻くことも知らぬ兵士もおりました。

馬匹や兵器類は全部、武装解除になった時に中国軍に渡しました。中支、特に揚子江の沿岸の旧日本軍占領地区では、八路軍（新四軍）と蒋介石軍との直接の戦乱はほとんどありませんでしたから、兵器、食料、被服、その他の諸資材は、ことごとく、平穩のうちに、蒋介石軍に渡しました。馬担当の者は、愛馬との別れがつかつたと言う人もいたようです。

武装解除後は、咸寧から、下流の九江へ集結抑留されたのですが、自主抑留でしたからシベリアや満州・北朝鮮など共産系の所のような、強制労働は余り無かつたのですが、道路造りはさせられました。しかも、食料は米はわずかでしたので、雑草を入れた雑炊

にして飢えをしのいでいたのですが、栄養失調になるので、付近の農家などへ出稼ぎに出て、残った者が配給の食料を食べました。また、出稼ぎの兵隊が、農家からもらった食料を持ち帰って、戦友と分け合うなどの工夫をしつつ、帰国、復員を待ったのでした。中国地域は昭和二十一年夏頃までに大部分は復員できたのは幸いでした。